

---

# 不協和音

白黒 朝夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不協和音

### 【Nコード】

N44670

### 【作者名】

白黒 朝夜

### 【あらすじ】

魔法学園の生活。鴉と名乗る1年が来てから平凡とは遠い日常が訪れる。

BL学園恋愛ストーリー。

## 巻　　ゝ騒音ゝ（前書き）

副会長「すみません。あの、塾が・・・」

有也「嘘だろ！書記も1年も帰って、お前しか頼れないんだぞ！」

副会長「ですが、テストもあつて・・・」

有也「仕方ないな、明日は早めに来いよ。」

副会長「ありがとうございます！」

有也「今日中に終わるかな・・・」

## 壱 騒音

静かな校舎。  
人影も無い。

って、あたりまえだ。

今は夜の8時。

誰かいたらそのほうが問題だ。

俺はこの桜魔法学園の生徒会長。高野有也。  
たかのゆうや  
つい最近、高3になった。

この時間まで学校に残っていたのは、  
明日の入学式の準備をしていたからだ。

2年のやつらは塾があるらしいから、早めに帰らせた。  
副会長と3年書記は・・・塾だったな。  
まったく、役に立たない奴らだ。

結局、俺一人で準備をした結果この時間だ。  
あ、戸締りの点検をしてなかったな。

一年の校舎の廊下を歩く。  
おい、1-Aだけ電気がついてるぞ。  
消し忘れか？まったく、いいかげんにしろよ！  
ドアを開ける。

ふわ・・・

風が俺の頬を撫でた。

窓が開いてる。

ここは一階。窓から中に入れるよな。  
嫌な予感がする。もしかして不審者・・・

「ねえ。」

肩に手を置かれた。

「とりゃー!!」

反射的にその手を掴み・・・簡単に言えば「背負い投げ」をした。

「痛あゝ何するんすか。」

黒髪の少年だった。俺より背が少し低いから年下だろう。

「何だ、子供か。」

「子供じゃないっすよー明日、この学園に入学するんすよー」

そいつの服は全身黒の服だった。その横には大きな鞆があった。

「じゃあ何でこんな時間にいるんだ。」

「えっと・・・妖精さんに誘われて・・・」

こいつ、バカだろ。

「とりあえず保護者に連絡する。名前は？」

ほんじょうからす  
「本条鴉。」

「本名は？」

「いや、本名ですって！カラスって名前なの!!」

「そんな名前の人間がいるか。」

「本当ですよ調べたら分りますよ!!」

顔を覗き込む。嘘はついてないようだ。

「とりあえず家に帰れ。親が心配するぞ。」

鴉は急にうつむいた。

「親がないんすよ。昔、捨てられたから。」

「・・・家は？」

「里親のところに居たんすけど、高校受かったら出ていけって言われて。」

「じゃあ、何処に住んでるんだ。」

「漫画喫茶に居たんすけど、制服とか買ったら金が底をついて・・・」

「鴉が捨て犬のような目で俺を見る。」

「明日からは寮に泊まるけど、今日は公園にしか・・・」

「・・・仕方ないな。俺の家に泊まるか？」

そういつた瞬間、鴉の目が輝いた。

「わーい！先輩大好き！！」

俺はこの選択を一生後悔するとは思ってもいなかった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「高野君。」

副会長が俺に話しかけてきた。

今は朝の7時。

入学式のセリフの練習をしている。

「なんだ。」

「あの・・・」

おどおどしている。何かミスがあったのか？

「噂で聞いたんですが・・・」

「なんだ。はつきり話せ。」

「男の人を家に連れ込んだって、本当ですか？」

沈黙が続く。

周りを見ると、全員俺の方を見ている。

「あの、学園中の噂になっていて・・・」  
噂の元は見当がつく。どうせ、新聞部だ。

「とにかく、そんな噂は嘘だ。大体なんで男の俺が男を連れ込むんだ。」

副会長の目が泳ぐ。

「あの、2年ぐらい前から高野君は男色という噂が・・・」

「・・・お前。その噂信じてたのか？」

「えっと、その・・・はい。」

周りを見る。みんな下を向いている。

衝撃的な事実を知り、俺は泣きそうになっていた。

みんな、俺をそんな風に見ていたなんて・・・

そして、入学式が始まって、気がつけば『生徒会の挨拶』だった。

ステージに上がる足が重い。

そして、視線が痛い。

「新入生のみなさん。おはようございます。」

視線が針のように刺さる。早くステージから降りたい。

「この学園のルールを守って、楽しい学園生活を過ごしてください。  
終わります。」

1 / 6 ぐらいの長さで無理やり終えた。  
ステージから降りる。視線が突き刺さる。

姿を消す魔法でも、勉強しよう。

く

つ  
づ



巻 〽騒音〽(後書き)

ここまで見てくださってありがとうございますー!!

恋愛中心になりそうだな・・・  
次回も見てください！

弐 〱 雑音〱 (前書き)

鴉「先輩、なんで無視するんすか？」

悠太「・・・」

鴉「一緒に夜を共にした中じゃないっすかー」

悠太「これ以上言つと殺すぞ。」

## 貳 〱 雑音 〱

俺は高野悠太。

1話を読んでくれた方は知ってると思うが、俺は変な噂を流されて困っている。

「で、その話をなんで俺にするんだよ。」

俺はこの話を友人、時雨零しぐれいに話した。

「調べたらお前も似たような噂流されたことあったらしいから。」

「まあ、一回あったな。友達と変な関係だって。」

「そのときはどうやって、噂が無くなったんだ？」

「時間が解決してくれた。」

「いいよな。時間魔法使いのやつは。」

「いや、それは関係ねえよ。」

時雨は黒髪に左の横髪の一部が白。という変な髪の色をしている。

「でも、根も葉もない噂だろ。」

「・・・あー・・・うー・・・」

「その答え次第でお前との距離感が決まるんだが・・・」

「泊まらせたのは事実だが・・・」

時雨が俺から遠のいた。

「最後まで聞けよ。」

\*\*\*\*\*

「で、可哀想だと思って泊まらしたってわけか。」

「ああ、そつだ。」

「そいつの名前って、鴉だっけ」

「ああ、なんだ、手伝ってくれるのか。」

「まあな。その代わり・・・」

「分った。新聞部の部費を増やそう。」

俺らは固く握手をした。

「あと、桜会が集会するんだって。」

『桜会』とは生徒会に反抗する組織だ。かなり厄介な組織で、けが人も出ている。

「分った。場所は？」

「不明。」

「そうか・・・」

組織の中に記憶を操る魔法を持っている奴がいるらしい。それぐらいしか分らない。

「じゃあ、俺は新しい情報を探しに行くから。」

「おう。また頼むぞ。」

持つべきものは友人だな。

後ろから抱き付かれた。

「悠太さん！迷子なのです！」

振り返ると美雨<sup>みう</sup>がいた。

美雨は先生の使い魔で、元は猫だが、魔法で人型になっている。

「誰が迷子なんですか？」

美雨は人間で言うところと14歳ぐらいだ。猫の耳と尻尾があって、愛らしい。

「美雨が迷子です！」

ピンクの耳が揺れる。か、可愛い・・・

「何処に行く途中ですか？坊ちゃん。」

「一<sup>はじ</sup>に会ったのです。」

「一先生は・・・職員室ですよ。お送りしましょうか？」  
「はい！なのです！」  
生徒によって美雨が拉致される事件が6回ほどあったのは事実だ・・・。

職員室についた。

「ー！頼まれていたお薬です！」

美雨が走る。

一先生は俺のクラスの担任で、本魔法使いだ。

「美雨、走るとこけますよ。」

「ミュー！！」

美雨がふらついた。

すかさず一先生が美雨を抱き起こす。

一先生の長い後ろで一つに結んだ茶色の髪が揺れる。

「大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫なのです！」

「あ、そうだ高野君。」

「はい。」

「君に用がある人が来てるよ。えっと・・・名前は・・・」

誰かに見られている気がした。

見回すと、黒髪の少年と目が合った。

こいつは確か・・・

「あ、鴉くんだ。」

## 貳 〱 雑音〱 (後書き)

ここまで見てくださってありがとうございます！

感想を書いていただければ光栄です！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4467o/>

---

不協和音

2010年10月29日12時06分発行